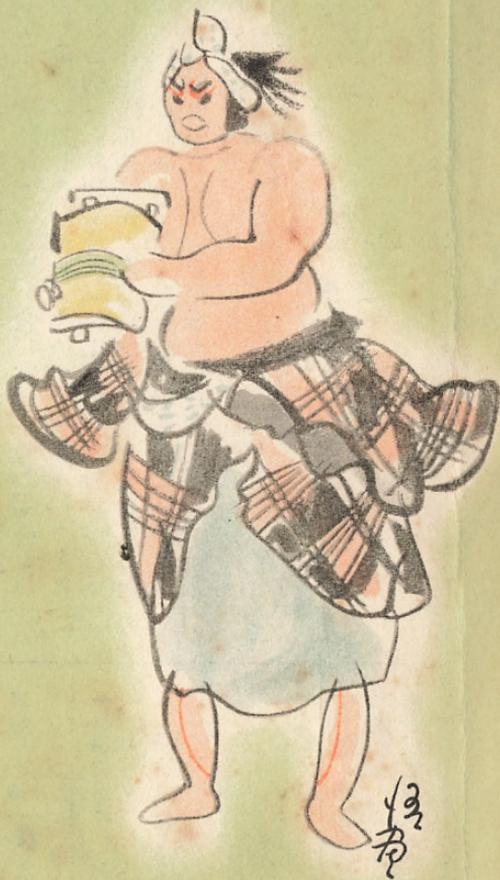


三月の

人形操緋繡



匠ツ橋

文楽荘

# 乍憚口上

彌生の空ものどかにて愈々春景色と相成申候ところ銃後の皆々様には愈々御機嫌に遊ばされ大慶此事に奉存候緒而當座は引續き四方皆々様の御引立によつて連日連夜盛況を續け來り候ことは偏にわが傳統の郷土藝術御愛好の致す處と難有奉存候然るところ此度はいよゝ當座の本質に顧み更に大政翼賛の實を擧げ度座員一同に於ては一層の努力を仕り過般陸軍大臣閣下より全般に御垂示を賜はりたる「戰陣訓」の主旨を體し當座獨得の機構を以て新曲を編み御目先きの變化と相俟つて御娛樂のうち到此精神をお酌みとり願ひ度又其他上演の狂言はいづれも美はしき日本固有の道徳と人情に深き根ざしをもてる時代もの世話ものをおもしろく配列仕り候次第に御座候間何卒當座一同の熱意と努力を御諒察賜はり相變らず御來場被下成度偏に御願申上候

敬白

昭和十六年三月一日

四ツ橋畔

文樂座 敬白

昭和十六年三月一日初日

初日午後二時半開演

毎日午後三時半開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓五十錢

(一階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

一等御座席)は五日前より  
一等椅子席)は五日前より

前賣切符發賣致居候

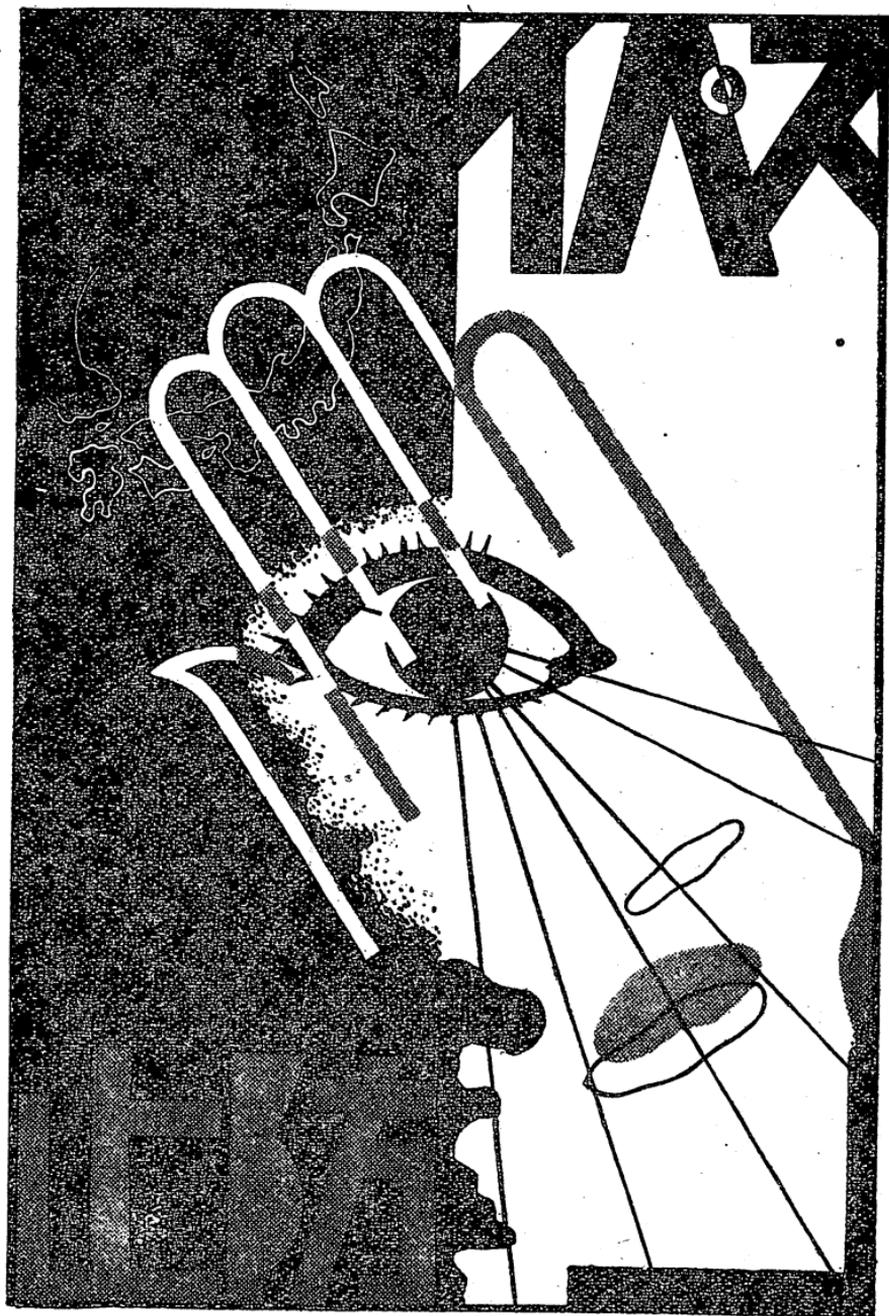
前賣切符

專用電話 南⑦四七壹壹番

一般御用の電話 南⑦三〇三二番  
南⑦三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。

公奉域職・踐實道臣



國 民 精 神 總 動 員

畫 意 報 國

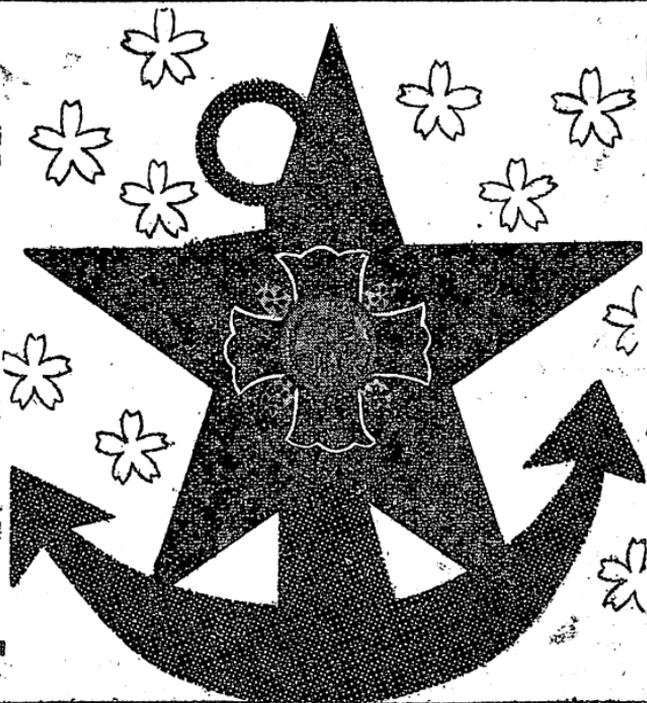
舉 國 一 致

堅 忍 特 久



國 を 護 っ た 傷 兵 護 れ

傷 兵 保 護 院  
國 民 精 神 總 動 員 中 央 聯 盟





行興月三

璃瑠淨形人

日初日一月三

演開半時二後午日初  
演開半時三後午日每

音牙春白月

團子賣の段

三時三十分より  
(幕間五分)

流しの枝 薩摩守忠度

はやし住家の段

五時五十分より  
(幕間十分)

半三勝 艶容女舞衣

酒屋の段

六時十分より  
(幕間十五分)

西亭誦詞符 大塚克三舞臺裝置  
戰陣訓

全十二景

六時二十五分より  
(幕間十分)

義經千本櫻

釣瓶壽し屋の段

六時五十五分より  
(幕間十分)

久松染 新版歌祭文

野崎村の段

八時四十五分より  
(打出し)



# 文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して来た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を

得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と人形の動作とがピッタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大内鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日

から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは、三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから

の名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。

それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひぱりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜粹)



人形役割割

團子賣の段

團子賣 杵造 吉田 玉幸  
女房 お福 桐竹 紋十郎



セ〜誰に抱かせませうぞえ、おまんに抱かせぞえ、見てもうまそな品物め、さうだよ高砂尾上のえ、ぢさまとばさまが箒を手に持ち、熊手をかついで、めかごさしよいそろ、小松の枯葉を、さらりとあつめて戻そとしたれば、上の枝には鶴の巢籠り、下の小池にや女龜男龜が空を眺めて、こわや松はな、お目出度松にて高砂文句も、爰らでとめましよ、尾の上かくては盡じと女夫連、ごひいきあつき町々を、弘めながらに走りゆく。





梗概

人形役割割

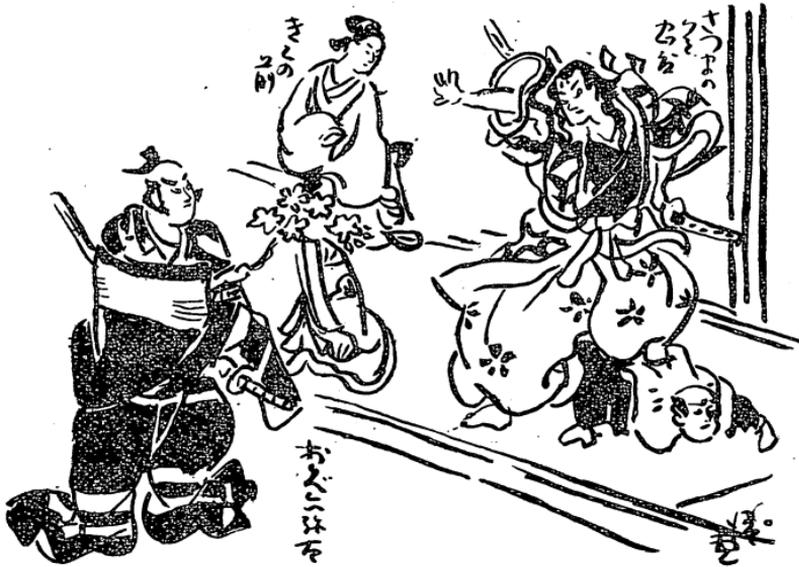
はやし住家の段

薩摩守忠度	吉田榮三
菊の前	桐竹紋十郎
岡部六彌太	吉田玉藏
乳母はやし	桐竹政龜
人足廻し茂次兵衛	桐竹紋太郎
倅太五平	吉田玉市
梶原景高	吉田玉徳
取巻	大ぜい

薩摩守平忠度は俊成卿の宅を訪ひ、別れを告げて「さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」の詠歌を渡し「先生の御情にあづかつて勅撰集に御入れ下さるなら、草葉の蔭からも御恩は忘れ申しませぬ」と語り、須磨の陣所をさして行く道に日は暮れ、津の國菟原の里にさまよひ或る一軒の伏屋に一夜の宿を乞ふた。この家こそ忠度の愛人で俊成卿の娘菊の前の乳母林の住家で兩人は奇しき出會を喜んだ。

その夜盜人が忍び込んだが、林が之を捕へて見れば我が子太五平である。母は之に説諭すれば、太五平は詞巧みに言拔ける。折節人足廻しの茂次兵衛が來たので、林は之に太五平の世話を頼み、太五平は茂次兵衛に勧められて軍場の道具持となり、母から餞別に太刀を貰ふ。

菊の前は愛人忠度の行方を尋ねて夜道を踏み、林の伏屋に來つて忠度と邂逅する。忠度は勅勘の



身を憚り、菊の前との縁を切らうとし、菊の前は  
愛人の爲めに命を賭しても離れまいとし、互に思  
ひ切なる風情である。

折から夜の寂寞を破つて陣太鼓の音、人馬の聲  
騒がしう響き、寄手の大將梶原平次景高が手兵を  
引連れ、林の伏屋を襲つて来る。然し忠度の奮戦  
に一たまりもなく追ひ拂はれる。この時、岡部六  
彌太が義經の命を奉じ、忠度を尋ねて来り、忠度  
の書いた「さゞ波や志賀の都」の歌の短冊を山櫻  
の流し枝に附けて差出し、「御身勅勘なれば名を憚  
り、『読人知らず』としてこの歌が千載集に入り  
ました」と知らせる。

忠度は義經の情け心と六彌太の情誼とに感激し  
首を渡さうとして明日の決戦を約し、駒に打乗り  
我が陣所に向ふ。菊の前は名残を惜しむ。之を見  
た六彌太は、刀を抜いて忠度の錦の右の片袖を切  
放し、林に之を渡して「是もその人の形見と思へ  
ども猶なつかしき袖のうつり香」と詠んで、忠度

が菊の前に與へる形見であるを諷し、互に名残を惜しんで別れる。

あはれ武夫の情の心の優しくも奥ゆかしきことか……

### (床本) 流しの枝の段

相手なければ忠度卿、息を休むる其中も油断ならざる  
植生のやどり、いかゞして防がんと心を配る時しもあれ  
又も寄せくる鬨の聲、貝鉦鼓攻め太鼓、手に取る如く聞  
ゆれば、忠度はつと心付き、扱こそ景高、大軍を催し重  
ねて向ふと覺えたり、戰場ならば敵の勢何萬騎にて圍む  
とも打破り驕惱ませ、譽を顯はし見せんずもの、軍中に  
引返し願ふ詠歌も腰をれの、望も叶はず剩へさしも名高  
き忠度が斯く荒屋に身を忍び、敵に圍まれやみく〜と生  
捕られんは後代迄、屍の耻辱名の穢れ、エ、口惜しや淺  
ましやと拳を握り齒嚙をなし怒りの涙てる月に、雫を降  
らすが如くにていたはしくも亦道理なり。透もあらせず  
表の方、寄せくる軍兵むら立つ提燈天地を照し亂れ入る  
よと見る所に、きはなくして討手の大將、掛鳥帽子に花田

の大紋さはやかに長袴の〜りをとき悠々然と立向ひ武  
藏國の住人岡部の六彌太忠澄、忠度卿に見參としづ〜  
と打通り傍近く謹んで、此度源平兩家の軍は私ならぬ院  
宣を蒙り、範頼義經罷向へば兩陣互に晴勝負、潔き軍は  
せずして抜けがけせし景高が卑怯の振舞、聞くに忍びず  
此六彌太が參りしは義經の嚴命、其仔細は先達て俊成卿  
へお頼み有りし御詠歌の内、さゞ波や志賀の都はあれに  
しを昔ながびの山櫻かな、右の御歌千載集に入りしかど  
勅勅ある御身なれば名は憚りて讀人しらずとなりし趣、  
則ち集に入りたる印、此短冊御覽に入れよと山櫻の流枝  
に結び付けたる以前の短冊恭しく差出せば、忠度につこ  
と打笑み給ひ、我が詠歌を我筆の願ひも仇花ならぬ印、  
御芳志の山櫻ヘア、忝しと押戴き、敵味方と隔つれば打  
捨置かるべかつしを、思ひ寄らざる義經の仁心にて歌人  
の數に加はり和歌の譽を殘す事生涯の本望死しても忘れ  
ぬ悦びぞや、とても遁れぬ身の不運、死すべき時に死せ  
ざれば、死に勝る恥有りりと、名もなき愚人の手にかゝり  
見苦しき最期もせんかと後悔せし折に幸ひ、武勇の聞え  
隠れなき六彌太に生捕られれば忠度が恥辱はあらじ、サア

依て繩かけられよと御手を廻し待給へば、コハ心得ぬ御  
 仰せ、某君の討手には參らず、敵味方の勝負は戰場、其  
 時は兩家の晴業容赦はないぞ、互に時の運に任せん、但  
 し梶原が如き弱みを見かけ拔駈して手柄にせんと思ふ様  
 な六彌太と思召さるゝか、ハハ……はつとあざ笑へば  
 忠度卿理に服し、實に〜是は誤つたり、盛んなる時は  
 制し、衰ふる時は制せらるゝ理、いかなれば義經といひ  
 汝迄誠有る一言、心魂に徹して今さら返す詞もなし、惜  
 しからぬ命なれども明けなば陣所へ立歸り、花々しく軍  
 をせん、其時望みは御邊が首、忠度卿は我討取る、必ら  
 ず討たれよ、おんでもない事、アレ〜八聲の鶉も鳴く  
 明くる間近しと申せども路次の狼藉覺束なし、陣所へ御  
 供仕らん、ソレ〜用意の馬引けと飾立てたる黒の駒、  
 御前に差寄する、辭するに及ばず忠度卿、立髮攪んでゆ  
 らりと召せば一問の内より菊の前、コレなう暫しと駈出  
 で給ふを林は押とめ、立身で隠せば岡部の六彌太、夫と  
 悟つて忠度の脱ぎかけ給ひし上着の袖、刀を抜いてふつ  
 と切り、コレ〜乳母といふに恟りハテ扱ふしきな顔  
 せまい、總じて老女は嫗といふ又姥とも呼ぶ、今宵忠度

卿のお宿を申せし御褒美に是を遣はす、それとも若々し  
 き錦の片袖、年寄が貰ふて益なしと思はゞ外にほしがる  
 方も有るべし、是も其人の形見と思へども、猶なつかし  
 き袖のうつり香といふ歌の心、ナ、其方が耳にソレ、菊  
 の前よく心得てお受け申せと差出せば、コハ冥加なき仕  
 合と戴く右の片袖は右の腕を落ちかたの軍に討死し給ひ  
 し後の哀れとしられたる。思ひの種や涙の種、仁義を種  
 の六彌太が東雲近し急がんと先に進んでたつか弓、いは  
 ぬはいふにいやまさる暇乞さへ泣顔に見送る姿ふり返る  
 心の種の詠歌も昔ながらの山櫻、散行く身にも指かざす  
 流の枝の短冊は世々に響を残す種、歎きの種の離れ際、  
 諫めを種と隔つれど、はてし涙の悲しみを俱になづみて  
 耳を垂れ嘶く聲も哀れそふ駒の足取り諸手綱引きわかれ  
 行く曉の空も名残や惜むらん。



酒屋の段

三勝七艶容女舞衣

酒屋の段

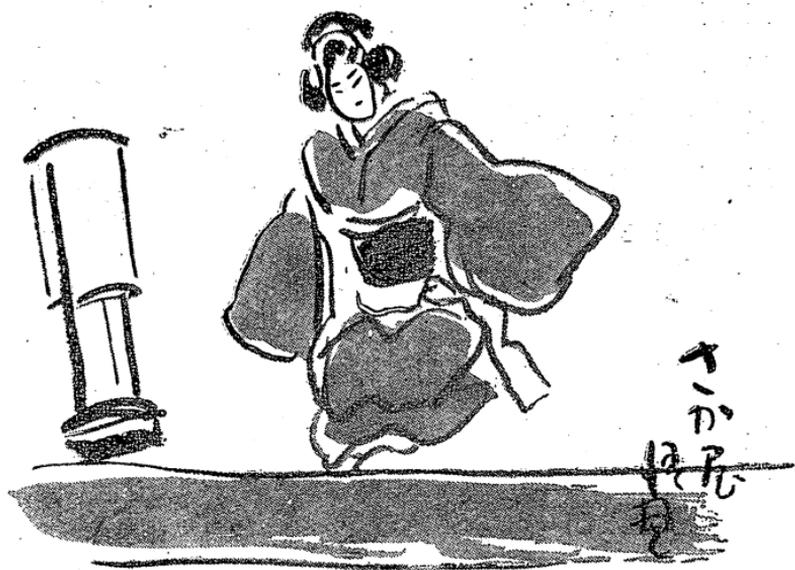
人形役

美茜舅半親嫁  
 濃屋宗衛兵半お  
 屋半宗衛兵半お  
 三七岸房衛園  
 勝七岸房衛園

桐桐吉桐桐吉  
 竹竹田竹竹田  
 紋紋小政門文  
 司郎吉龜造郎

切 豊 豊 竹  
 野 鶴 澤 澤 本  
 澤 澤 竹 澤 本  
 吉 清 駒 新 文  
 藏 郎 夫 左 字  
 野 鶴 澤 澤 本

元祿八年十二月六日(二三五五)の夜、大阪長町四丁目の女舞の藝人三勝は大和五條の茜屋半七と馴染み、遂に愛兒お通を残して千日墓地の側で情死したが、この事件を翌九年正月大阪の岩井半四郎座で「茜の色揚」の外題で上演し、これが大評判となり歌祭文にも作られて流行し、その廿五回忌には、紀海音が「笠屋三勝二十五年忌」と題して初めて淨瑠璃(享保四年||二三七九||上演?)に仕組んだ。更にこの改作として延享三年十月(二四〇三)には春草堂作「浮名茜染五十年忌女舞劍紅楓」が上演されたが、この筋立を受けて更に新工夫をこらしたのが「艶容女舞衣」で、作者は竹本三郎兵衛、豊竹應律、八民平七。安永元年(二四三二)十二月大阪豊竹座に上場された。全曲は上の巻「生玉、島之内茶屋」中の巻「新町橋、長町」下の巻「今宮戎、上塩町(酒屋)」の三巻六段に分れ、「今頃は半七さん」で知られた酒屋の段が殊に有名で全篇の山となつて居る。



梗概

茜屋は大和五條の名ある家であつたが、逼塞して大阪に出で、上塩町三丁目格子構への家に酒店を出し、老夫婦は一子半七に妻お園を迎へ、丁稚長太を使つて約まやかに暮してゐる。

冬の日暮れ頃三勝は幼児を抱いて來り「進物にしますのですが、お宅の柄樽に銘酒を一升詰めて下さい」と言うて代金を拂ひ、長太を頼み之に其の柄樽を持たせて去つた。

入違ひに半兵衛は町年寄、五人組の人たちと共に代官所から歸る。彼は我が子が人を殺した罪を引受け、縛り繩を掛けられたのを着物で隠してゐる。半兵衛の妻は何故に夫が代官所に呼ばれたのかと案じてゐるので、半兵衛は「呼ばれたのは別に變つた事でもなかつた」と安心させるのだつたやがて長太は柄樽を持ち、幼児を抱いて泣き乍ら歸つて來て「今の女が途中で、ちよつと用達して來るからと、この兒と柄樽を預けて何處かへ行

つたまゝ、ぬくら待つても歸へつて來ない」と云ふ。其樽には「進上茜屋半兵衛様」と、張紙がしてあるので老夫婦は不審に思ふ。

折から宗岸はお園を連れて來り、娘を取戻した過ちを謝し「どうぞ元通りにお園を半七の妻として下さい」と頼む。お園も「お氣に召さずとも哀れと思されて、元の儘に嫁として使つて下さい」と涙に袖を濡しつゝ願ふ。然し半兵衛は我が子半七の不身持から、お園の行末を氣の毒に思つて承知しない。そこで宗岸は貞心堅固なお園の心を思ひ遣り、子を思ふ親心のせつなさ語り、同時に半兵衛が我が子の殺人の罪を被て、縛られてゐる事を指摘し、同情の涙にくれた。之を聞いて老婆は、つと驚き顔を曇らす。半兵衛はかねてお園の美しい心に感じ「こんな嫁は世に稀な嫁鑑、去せともないは山々なれど、此方に置けばこのまゝの若後家、それがゐたはしい」と聲を上げて噎び入る。そして「内密の話がある」とて妻と共に宗岸

を誘うて奥に入つた。

お園は獨り取殘されて夫の身を案じ「今頃は半七様何處にどうしてござらうぞ」と斷腸の念に消入るばかり。折節先刻の拾ひ兒が目を覺し、乳を吞まうとしてお園の膝に這寄る、お園は之を見てお通であるに驚く。半兵衛も宗岸もまろび出て、「半七三勝が仲に生れたと云ふのは此の兒か」と眺め入り、女兒の懷を探つて書置を取出した。其の文に細々と不孝を謝し、殺人罪を犯した事を述べ、お園にも詫びて來世の契りを誓ひ、氣に懸るのはお通が事、何卒子と思し召して養育の程、かへすゝも頼み上げますとあるので、相寄つて互ひに讀んでは泣き、泣いては讀み、行燈の灯も幽にしばだたく下に、滿座哀愁の氣につままれた。戸外ではひそかに三勝半七が來て、掌を合せて親を拜み子を思ひ、千萬無量の感慨に名殘を惜み、血の涙を拭ひながら死出の旅へと急ぐ……。

(佐和利) 酒屋の段

跡には園が憂思ひ、かゝれとてしも烏羽玉の、世の味氣無き身一つに、結ばれ解ぬ片絲の、繰返したる獨言、今頃は半七様、何處に如何してござらうぞ、今更返らぬ事ながら、私と言ふ者無いならば、半兵衛さんもお通に免じ子まで成したる三勝殿を、疾にも呼入れさしやんしたら半七様の身持も直り、御勘當も有るまいに、思へば、此園が、去年の秋の煩ひに、寧ろ死んで終ふたら、斯うした難儀は出来まいもの、お氣に入らぬと知りながら、未練な私が輪廻故、添臥は適はずとも、お側に居度いと辛抱して是まで居たのがお身の仇、今の思ひに比ぶれば一年前に此園が、死る心が付かなんだ、堪へて給へ半七様、私や此様に思ふてゐると、恨みつらみは露程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増る憂思ひ。

言ふ聲洩るゝ三勝が、思はず乳房を握り締め、乳は爰に有る物を飲まして遣たい、顔見度い乳が張るわいのうと身を慄はせ、駈入らんにも關の戸に空音も成らず羽拔鳥親は外面に血の涙、子はやすかたの安からぬ、悲しき迫

る内と外、一度にわつと湧き出る、涙浪花江泉川小きんを汲出す如くなり。





# 「戰陣訓」上演に就て

白井松次郎

## 「戰陣訓」場割

陸軍大臣閣下の御垂示に相成りました「戰陣訓」は非常に結構な御文章と拜しまして曩に弊社關係方面の一同に配付いたし、謹んで御趣旨を服膺いたして居りますが、此度陸軍記念日を機會に所屬各劇場に於きましても、此本旨をそれ／＼の機構に織り込みまして、御觀客様の御一燦に供することゝいたしました。當座に於きましても、又日本固有の傳統に根ざします藝術の本位に合致いたしまする爲めに此度「戰陣訓」の本訓を一々歴史の事實に照し、新作曲をいたし、文樂獨得の機構によつて皆様の御批判を仰ぐことゝ相成りましたが、何分早急の準備で充分の事は御期待に添はないまでも、職域奉公の一端を果し得ますれば誠に幸ひと存する次第でございます。

- 第一景 天の岩戸（皇國）
- 第二景 美々津濱御船出（皇軍）
- 第三景 檣原神宮（軍紀・敬神）
- 第四景 高津の宮（率先躬行）
- 第五景 菅公配所（清廉潔白・臣道實踐）
- 第六景 元寇の役（團結）
- 第七景 楠公櫻井の驛（忠孝）
- 第八景 義士の討入（協同・死生觀）
- 第九景 二宮金次郎（質實剛健）
- 第十景 旅順二〇三高地（攻撃精神）
- 第十一景 日本海々戰（必勝の信念）
- 第十二景 國民總進軍（防諜・皇恩布浴）

(床本) 戰陣訓

そもく戦陣訓の其要旨體せ一億國民の遠く神代の昔より八紘一字の御聖徳岩戸神樂に黎明の光尊く

ほのくとも往昔や皇軍の美々津の濱を御船出征くは正しき仁武の道

金鶏の光かゞやきて恩威になびく青人草幾千代よろづ榮え繁る申すもおろか樞原の皇紀の始

かしこけれ賤が伏家の民草の幸おぼし召し高きやに登りて見れば煙立つ民のかまどは賑ひにけり御仁慈あつき御徳の高津の宮ぞ

有難や去年の今夜清涼に待す恩賜の御衣の今此に延喜如月月影の清き心の道實が臣道つくす今の世に皇恩尊き太宰の宮

筑紫筑前多々良濱元軍競ふ國難に固く結びし日の本の國民草のおしなべて吹神風に夷敵原水屑となりし幾十萬是ぞ神國無双心皇運無窮ぞ尊けれ父の訓しに櫻井の里の青葉のはらくと忍び音

洩らす一時雨二葉の十せ三つの朝四條賤のあづさ弓無き數に入る名をとどむ

いろは匂える四十七今ぞとけ行く朝雪の思ひは千々に亂るとも一つ心にとけ落ちて本望とぐる泉岳寺

煙は絶えぬ二宮の社と共に徳尊き幼き姿金次郎柴刈山も破れ瀬戸の月もるかべもいとひなく螢雪爰に實を結び尊徳翁と仰がるもたゆみ無き身的心なり

たゆみ無き身の心こそ實に忘れぬ心の魂爾靈山頂風寒く颯々として鬼骨に浸む英魂爰に幾千哉涙も氷る身も緊る英靈爰に幾萬か我攻撃の精華こそ世界に冠す寶なれ

我必勝の信念を今ぞ現す日本海興國興廢此一戦にあり各員一層奮勵努力せよ世界不朽の海戦史千古未曾有の戦捷史勝つて兜の緒をしめん

いざ國民よ進軍だ皇恩布浴に防諜に心をしめよ一億民正義の民の日本人いざ國民よ團結だ戦陣訓を胸にして心たゆむな一億民正義の民の日本人

# 戰陣訓

## 陸訓第一號

本書ヲ戰陣道徳昂揚ノ資ニ供スベシ

昭和十六年一月八日

陸軍大臣 東條英機

### 序

夫れ戰陣は、大命に基き、皇軍の神髓を發揮し、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝ち、遍く皇道を宣布し、敵をして仰いで御稜威の尊嚴を感銘せしむる處なり。されば戰陣に臨む者は、深く皇國の使命を體し、堅く皇軍の道義を持し、皇國の威徳を四海に宣揚せんことを期せざるべからず。

惟ふに軍人精神の根本義は、畏くも軍人に賜はりたる勅諭に炳乎として明かなり。而して戰陣竝に訓練等に關し準據すべき要綱は、又典令の綱領に教示せられたり。然るに戰陣の環境たる、兎もすれば眼前の事象に捉はれ

て大本を逸し、時に其の行動軍人の本分に悖るが如きことなしとせず。深く慎重ざるべけんや。乃ち既往の經驗に鑑み、常に戰陣に於て勅諭を仰ぎて之が服行の完璧を期せむが爲具體的行動の憑據を示し、以て皇軍道義の昂揚を圖らんとす。是戰陣訓の本旨とする所なり。

### 本訓 (其の一)

#### 第一 皇國

大日本は皇國なり。萬世一系の天皇上に在し、皇國の皇謨を紹繼して無窮に君臨し給ふ。皇恩萬民に遍く聖徳八紘に光被す。臣民亦忠孝勇武祖孫相承け、皇國の道義を宣揚して天業を翼賛し奉り、君民一體以て克く國運の隆昌を致せり。

戰陣の將兵、宜しく我が國體の本義を體得し、牢固不拔の信念を堅持し、誓つて皇國守護の大任を完遂せんことを期すべし。

#### 第二 皇軍

軍は天皇統帥の下、神武の精神を體現し、以て皇國の

威徳を顯揚し皇運の扶翼に任ず。

常に大御心を奉じ、正にして武、武にして仁、克く世界の大和を現ずるものは神武の精神なり。武は嚴なるべし仁は逼きを要す。苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ斷乎之を擊碎すべし。假令峻嚴の威克く敵を屈服せしむとも、服するは聖たず従ふは慈しむの徳に缺くるあらば、未だ以て全しとは言ひ難し。武は驕らず仁は飾らず、自ら溢るゝを以て尊しとなす。皇軍の本領は恩威並び行はれ、遍く御稜威を仰がしむるに在り。

### 第三 軍 紀

皇軍軍紀の神髓は、畏くも大元帥陛下に對し奉る絶對順の崇高なる精神に存す。

上下齊しく統帥の尊嚴なる所以を感銘し、上は大權の承行を謹嚴にし、下は謹んで服従の至誠を致すべし。盡忠の赤誠相結び、脈絡一貫、全軍一令の下に寸毫紊るゝなきは、是戰捷必須の要件にして又實に治安確保の要道たり。

特に戰陣は、服従の精神實踐の極致を發揮すべき處とす。死生困苦の間に處し、命令一々欣然として死地に投

じ、黙々として獻身服行の實を擧ぐるもの、實に我が軍人精神の精華なり。

### 第四 團 結

軍は、畏くも大元帥陛下を頭首と仰ぎ奉る。渾き聖慮を體し、忠誠の至情に和し、擧軍一心一體の實を致さざるべからず。

軍隊の統率の本義に則り、隊長を核心とし、鞏固にして而も和氣藹々たる團結を固成すべし、上下各々其の分を嚴守し、常に隊長の意圖に従ひ、誠心を他の腹中に置き、生死利害を超越して、全體の爲己を没するの覺悟なかるべからず。

### 第五 協 同

諸兵心を一にし、己の任務に邁進すると共に、全軍戰捷の爲欣然として没我協力の精神を發揮すべし。

各隊は互に其の任務を重んじ、名譽を尊び、相信じ相援け、自ら進んで苦難に就き、戮力協心相携へて目的達成の爲力闘せざるべからず。

## 第六 攻撃精神

凡そ戦闘に勇猛果敢、常に攻撃精神を以て一貫すべし。攻撃に方りては果斷積極機先を制し、剛毅不屈、敵を粉碎せざんば已まざるべし。防禦又克く攻勢の銳氣を包藏し、必ず主動の地位を確保せよ。陣地は死すとも敵に委すること勿れ。追撃は斷々乎として飽く迄も徹底的なるべし。

勇往邁進百事懼れず、沈着大膽難局に處し、堅忍不拔困苦に克ち有ゆる障碍を突破して一意勝利の獲得に邁進すべし。

## 第七 必勝の信念

信は力なり。自ら信じ毅然として戦ふ者常に克く勝者たり。

必勝の信念は千磨必死の訓練に生ず。須く寸暇を惜しみ肝膽を碎き、必ず敵に勝つの實力を涵養すべし。

勝敗は皇國の隆替に關す。光輝ある軍の歴史に鑑み、百戰百勝の傳統に對する己の責務を銘肝し、勝たずば斷じて已むべからず。

## 本訓 (其の二)

## 第一 敬神

神靈上に在りて照覽し給ふ。

心を正し身を修め、篤く敬神の誠を捧げ、常に忠孝を心に念じ、仰いで神明の加護に恥ぢざるべし。

## 第二 孝道

忠孝一本は我が國道義の精粹にして、忠誠の士は又必ず純情の孝子なり。

戰陣深く父母の志を體して、克く盡忠の大義に徹し、以て祖先の遺風を顯彰せんことを期すべし。

## 第三 敬禮舉措

敬禮は至純なる服従心の發露にして、又上下一致の表現なり。戰陣の間特に嚴正なる敬禮を行はざるべからず。禮節の精神内に充溢し、舉措謹嚴にして端正なるは強き武人たるの證左なり。

## 第四 戰友道

戰友の道義は、大義の下死生相結び、互に信頼の至情を致し、常に切磋琢磨し、緩急相救ひ、非違相戒めて、俱に軍人の本分を完うするに在り。

### 第五 率先躬行

幹部は熱誠以て百行の範たるべし、上正しからざれば下必ず紊る。戰陣は實行を尙ぶ。躬を以て衆に先んじ毅然として行ふべし。

### 第六 責任

任務は神聖なり。責任は極めて重し。一業一務忽せにせず、心魂を傾注して一切の手段を盡くし、之が達成に遺憾なきを期すべし。

責任を重んずる者、是眞に戰場に於ける最大の勇者なり。

### 第七 死生觀

死生を貫くものは崇高なる獻身奉公の精神なり。生死を超越し一意任務の完遂に邁進すべし。身心一切の力を盡し、従容として悠久の大義に生くる

ことを悦びとすべし。

### 第八 名を惜しむ

恥を知る者は強し、常に郷黨家門の面目を思ひ、愈々奮勵して其の期待に答ふべし。

生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ。

### 第九 質實剛健

質實以て陣中の起居を律し、剛健なる士風を作興し、旺盛なる士氣を振起すべし。

陣中の生活は簡素ならざるべからず。不自由は常なるを思ひ、毎事節約に努むべし。奢侈は勇猛の精神を蝕むものなり。

### 第十 清廉潔白

清廉潔白は、武人氣節の由つて立つ所なり。己に克つこと能はずして物慾に捉はるゝ者、争でか皇國に身命を捧ぐるを得ん。

身を持するに冷厳なれ。事に處するに公正なれ。行ひ

て俯仰天地に愧ぢざるべし。

## 本訓 (其の三)

### 第一 戦陣の戒

一 一瞬の油断、不測の大事を生ず。常に備へ嚴に警めざるべからず。

二 敵及住民を輕侮するを止めよ。小成に安んじて勞を厭ふこと勿れ。不注意も亦災禍の因と知るべし。軍機を守るに細心なれ。謀者は常に身邊に在り。

三 哨務は重大なり。一軍の安危を擔ひ、一隊の軍紀を代表す。宜しく身を以て其の重きに任じ、嚴肅に之を服行すべし。

四 哨兵の身分は又深く之を尊重せざるべからず。思想戦は、現代戦の重要な一面なり。

五 皇國に對する不動の信念を以て、敵の宣傳欺瞞を破挫するのみならず、進んで皇道の宣布に勉むべし。

六 流言蜚語は信念の弱きに生ず。惑ふこと勿れ、動ずること勿れ、皇軍の實力を確信し、篤く上官を信頼

すべし。

六 敵産、敵資の保護に留意するを要す。

徴發、押收、物資の燼滅等は總て規定に従ひ、必ず指揮官の命に依るべし。

七 皇軍の本義に鑑み、仁恕の心能く無辜の住民を愛護すべし。

八 戦陣苟も酒色に心奪はれ、又は慾情に驅られて本心を失ひ、皇軍の威信を損じ、奉公の身を過るが如きことあるべからず。深く戒慎し、斷じて武人の清節を汚さざらんことを期すべし。

九 怒を抑へ不満を制すべし。「怒は敵と思へ」と古人も教へたり。一瞬の激情悔を後日に残すこと多し。

軍法の峻嚴なるは特に軍人の榮譽を保持し皇軍の威信を完うせんが爲なり。常に出征當時の決意と感激とを想起し、遙かに思を父母妻子の眞情に馳せ、假初にも身を罪科に曝すこと勿れ。

### 第二 戦陣の嗜

一 尙武の傳統に培ひ、武徳の涵養、技能の練磨に勉むべし。

「毎事退屈する勿れ」とは古き武將の言葉にも見  
えたり。

二 後顧の憂を絶ちて只管奉公の道に勵み、常に身邊を  
整へて死後を清くするの嗜を肝要とす。

屍を戦野に曝すは固より軍人の覺悟なり。縦ひ遺  
骨の還らざることあるも、敢て意とせざる様豫て  
家人に含め置くべし。

三 戦陣病魔に斃るゝは遺憾の極なり。特に衛生を重ん  
じ、己の不節制に因り奉公に支障を來すが如きこと  
あるべからず。

四 刀を魂とし馬を寶と爲せる古武士の嗜を心とし、戦  
陣の間常に兵器資材を尊重し、馬匹を愛護せよ。

五 陣中の徳義は戦力の因なり。常に他隊の便益を思ひ  
宿舎、物資の獨占の如きは慎むべし。

「立つ鳥跡を濁さず」と言へり。雄々しき床しき皇  
軍の名を異郷邊土にも永く傳へられたきものなり  
總じて武勳を誇らず、功を人に譲るは武人の高風と  
する所なり。

他の榮達を嫉まず己の認められざるを恨まず、省  
みて我が誠の足らざるを思ふべし。

七 諸事正直を旨とし、誇張虚言を恥とせよ。

八 常に大國民たるの襟度を持し、正を踐み義を貫きて  
皇國の威風を世界に宣揚すべし。

國際の儀禮亦輕んずべからず。

九 萬死に一生を得て歸還の天命に浴することあらば、  
具に思を護國の英靈に致し、言行を慎みて國民の範  
となり、愈々奉公の覺悟を固くすべし。

### 結

以上述ぶる所は、悉く勅諭に發し、又之に歸するもの  
なり。されば之を戦陣道義の實踐に資し、以て聖諭服行  
の完璧を期せざるべからず。

戦陣の將兵、須く此の趣旨を體し、愈々奉公の至誠を  
擲んで、克く軍人の本分を完うして、皇恩の渥きに答へ  
奉るべし。

此度茲に「戦陣訓」の制定を見るに到りましたが、  
之はたゞに將兵ばかりでなく、職域奉公に盡す吾々  
も亦銘記遵奉すべきであります。



平家の落人維盛卿が彌助と名をあらため世を忍ぶ身その日を送つて居た。

彌左衛門の娘のお里は維盛の彌助に思ひを通はず様になり、彌助もお里にはその素性を明さず、何時かお里の婿になつて居た。

彌左衛門は維盛の父小松の内府重盛の恩になつた者で、その縁故から維盛の爲には少からず心を碎いてゐたのである。

彌左衛門は未だ歸つては來ない。その留守を覗つてやつて來たのは、いがみの權太だつた。

權太は如何にもしほしほとした様子で、昨夜大盗人に遇ひ代官所へ上げる年貢の銀三貫目を盜取られ、言譯けなくお仕置にあはうより遠くの國へ立ち退きます、と母親にかき口説いた。氣の弱い母親はうま／＼とこの權太のわなにひつ掛つてしまつた。親爺どには内緒でと、權太に云ひ分だけ銀を出してやるのだ。何か入れ物と云つてよい思案もなし、店先に並べてある鮮桶の中へ銀を

入れて持ち出さうとした。そこへ丁度、あたふたと歸つて來た彌左衛門に出合ひ、銀は鮮桶に入れたまゝ、其處へ並べて知らぬ顔をして奥へ隠れてしまつた。

彌左衛門はあたりを見廻し、持つて歸つた小金吾の首を、そつと鮮桶の中へ入れて置いた。

夜も次第に更けて行つた。お里は寢仕度に氣もそは／＼して居る。これを見るにつけ彌助の維盛はこの初心のお里があはれでならなかつた。お里を先へ寢かせた維盛は、遙か都の空へ殘して來た若葉の内侍やわが子六代君をなつかしく思つたのであつた。

時にほと／＼と門の戸をおとなふ物音、それは女の聲で一夜の宿を、と云ふのだつた。斷りを云はんと門の扉を明けて見ると、月影にそれとまがひもなく若葉の内侍と六代君であつた。も早寢入つた様子のお里の寢息を窺つて維盛は内侍六代を家の中へ密かに通して、この不思議な親子夫婦の

此処由豆竹古鞆太夫  
相勤申枝



對面の所以を聞くのだつた。

若葉の内侍は、姿の變つた夫維盛の身なり貌に涙した。維盛もお里と假りの契りを結んだのは、娘の戀路から大事の漏れるのを愁ひ、彌左衛門にも口正して我が身の上を明さず義理故詮なく今日に至つたと、譯を語り聞かせた。

傍にお里は何時か目を覺して、この物語の始終を聞いて居たのだつた。

お里はこらへかねてわつと泣き出し内侍若君をまづ／＼と上座へ直した。

其處へ來たのは村の役人、此處へ梶原様が見えます、と云ひ置いて歸つて行つた。

維盛も内侍若君も、さてはいよく／＼運も盡きたかと覺悟したのであつたが、お里はさそくの機轉に親の隠居屋敷上市村へと逃がしたのであつた。奥に様子を聞いて居たいがみの權太は、お觸れのあつた維盛夫婦六代君、捕へて褒美にありつかんと、止めるお里を蹴倒して、最前の銀を入れた

鮮桶小脇に抱へ後を慕つて追つて行つた。

この一大事に彌左衛門もお里も母親もたゞ狼狽へるばかり、さう云ふ中にも梶原平三景時は矢筈の提灯も嚴めしく、數多の家來に十手を持たせ入つて來た。

彌左衛門が維盛をかくまひ居ること訴人によつて明白、首打つて渡すか、但しは違背に及ぶか、返答如何に、と梶原は詰め寄つた。彌左衛門も腹を据え、隠しても隠されぬ故、既に維盛の首は打つてこの通りと、鮮桶を持つて出た。母親は最前權太が銀を入れて置いた鮮桶を出されては、と彌左衛門と云ひ争つて居る中、維盛夫婦餓鬼め迄いがみの權太が生捕つたりと、聲高らかに呼ばはり乍ら、若君内侍を猿縛りに維盛の首を携へて來るのだつた。梶原は大満悦で、褒美には親彌左衛門が命赦して呉れう。又頼朝公着用の陣羽織、鎌倉へ持ち來らば金銀と釣替へにする、と陣羽織と引替へに繩付きを受取つて悠々と歸つて行つた。

今まで耐へて居た彌左衛門は、憎し憎しと、隙をねらつて權太の脇腹を刀で刺し通した。權太はその刃物を抑へて云つた。

こなたの力で維盛を助けることは叶はぬ。前髪の首を彌助と云つて差出した所で、どうして梶原ほどの侍が瞞されませう、と云ふのだ。彌左衛門は最前の鮮桶を開いてみると中から出たのは銀三貫目だつた。これはと驚き様子を問へば、さつき權太が持つて行つた鮮桶を開いてみれば小金吾の首、これ程までに心を碎く父親の心を察し、その前髪を剃り落して差出したのであつた。

權太が苦しい息に取出す一文笛を吹けば、物蔭にひそんで居た維盛卿はじめ内侍六代君は、茶汲みに姿を變へて馳けつけて來た。權太が最前繩付きにして梶原に渡したのは年頃も同じ權太の女房小仙と一子善太だつたのだ。

かく善心に立ち返つた權太を刺した父親は我が不明を悔んだ。權太は今までの親不孝のつくぬひ

に、我が妻、わが子を血を吐く思ひで繩にかけたのだつた。

維盛卿も感じ入り、頼朝への恨みの一と太刀と最前の陣羽織を刺さんと取り上げると、内ぞ床しき、内ぞ床しきと古歌の下の方が書いてあつた。何ごとゝ縫目を裂いてみると、中には袈裟衣、珠敷迄添へて入つて居た。

この謎は何だつたらう。

その昔、小松の内府が頼朝の命を助けたことがあつたのだ。その恩返しと梶原に命じて維盛の命を助け、出家させ様と計つた頼朝だつたのである。權太はこれを聞いて猶ほ悔んだ。たばかつたと思つた梶原に却つてたばかられたのであつた。

今はの命の權太を後に、維盛卿は高野へ、内侍は六代君を高雄の文覺へ頼みに、彌左衛門を供に連れ發足するのだつた。

(床本) 壽し屋の段 (切)

神ならず佛ならば、夫ぞとも、知らぬ道をば行迷ふ、若葉の内侍は若君を宿ある方に預け置き、手負の事も頼まんと、思ひよる身も縁のはし、此家を見かけ戸を叩き、一夜の宿と乞ひ給へば、維盛は好い退き機と表の方叩く扉に聲をよせ、此内は鮎商賣、宿屋ではござらぬと愛想のないが愛想となり、イヤ申し稚きを連れた旅の女是非に一夜を宜ふにぞ、斷り云うて歸さんと、戸を押開き月影に、見れば内侍と六代君、はつと戸をさし内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろ／＼立寄り見たまへば早くも結ぶ夢の體、表に内侍は不思議の思ひ、今のはどうやら我夫に、似たと思へどなりかたち、つむりも青き下男、よもやと思ひ給ふ中、戸を押し開いて維盛卿、若葉の内侍か、六代かと宣ふ聲に、シエ、扱は我が夫、と様か、ノウ懐かしやと取縫詞はなくて三人は、泣くより外の事ぞなかりき、先々内へと密に伴ひ、今宵は取わけ都の事、思ひくらし居たりしが、親子共に息災で不思議の對面、去りながら、某此家に居ることを、誰知らせしぞ殊にまた、遙々の旅の空、供連れぬも心得ずと等ね給へば若葉の君、都でお別れ申してより、須磨や八

鳥の軍を案じ、一門残らず討死と、聞く悲しさも嗟嘆の奥、泣いてはつかり暮せしに、高野とやらんにおはすと云ふ者ある故に、小金吾召連れお行衛を、心ざす道追手に出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、頼みも力もない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中將維盛様が、此お姿は何事ぞ、袖のない此羽織に、此つむりはと取付て、咽び絶入り給ふにぞ、面目なさに維盛も、頼に手をあて袖をあて、伏沈みてぞおはします、涙の内にも若葉の君伏したる娘に目を付け給ひ、若い女中の寢入ばな、定めてお伽の人ならん、斯くゆるかしきおくらしなら、都の事も思召し、風の便もあるべきに、打捨て給ふに胸怒と恨み給へば、ホホ夫と心にかゝりしかど、文の落ちる恐れあり、わけて此家の彌左衛門、父重盛の恩報じと、我を助けてこれ迄に、重々厚き夫婦が情、何がな一禮返禮と、思ふ折柄娘の戀路、つれなく云はゞ過あらん、かへつて恩が仇なりと、假の契りは結べ共、女は嫉妬に大事も滅すと、彌左衛門にも口留して、我身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りしと、語り給へば伏したる娘、こたへ兼しか聲を上げて、わつと計りに泣

出す。コハ何故と驚く内侍若君引連れ逃退んとしたまへば、ノウコレお待ち下されと、涙とゞもにお里はかけよ  
り、先づこれへと内侍若君上座へ直し、私はお里と申して此家の娘、いたづら者憎い奴と、思召されん申譯  
過つる春の頃、色めづらしい草中へ、繪にあるやうな殿御のお出、維盛様とは露知らず、女の浅い心から、可愛らしい、いとらしいと、思ひ初めたが戀のもと、父も聞えず母親も、夢にもしらすして下さつたら、譬へこがれて死ねばとて、雲井に近き御方へ、鮎屋の娘が惚られうか、一生連添ふ殿御ちやと、思ひ込んで居るものを、二世のかまめは叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に、あづかりましたとどうと伏し、身をふるはして泣きければ、維盛卿は氣の毒の、内侍も道理の詫び涙かはく間もなき折からに、村の役人かけ來り、戸を叩いて、コレへ愛へ梶原様が見えます。内掃除しておかれいと云ひ捨て立歸へる。人々はつと泣目も晴れ、いかゞはせんと俄の仰天、お里はさつそくに心付き、先づ親の隠居屋敷、上市村へと氣をあせる。實に其事は彌左衛門、我にも教へ置きしがと、最早開かぬ平家の運

命、檢使を引受け潔く、腹かき切らんと身拵へ、内侍は悲しく。コレ此若の幼い氣盛りを思召し、一先づ愛をと無理なりに、引立てたまへば維盛も、子に引かざる後妻、是非なく其場をおち給ふ、御運のほどぞ危ふけれ。様子を聞いたかいがみの權太、勝手口より躍り出で、お觸のあつた内侍六代、維盛彌助めせしめてくれんと、尻引からげかけ出すを、コレ待つてとお里は取付き、兄様これは一生の私が願ひ、見放して下されと、頼めど聞かず勿飛し、大金になる大仕事、邪魔ひろくなと、すがるを蹴倒し張とばし、最前置きし銀の鮎桶、これ忘れてはと提げて、後を慕ふて追ふて行く。ノウとゞ様かゞ様とお里が呼ぶ聲彌左衛門、母もかけ出で何事と問へば娘はこれへ、都から維盛様の御臺若宮尋ねさまよひお出であり、積る咄しの其中へ詮議に來ると知らせを聞き三人連れて、上市へ落しましたを情けない、兄様が聞いてゐて、討取るか生捕て、褒美にするとなつた今、追かけてと云ふより恠り彌左衛門、ソレ一大事となしなみの朱鞘の脇差腰にぼつ込み、かけ出す向ふへハイハイと矢筈の提灯梶原平三景時、家來數多に十手持たせ道を

塞で、ヤア老耄め何處へ行く、逃げやうとて逃さうかと  
追取まかれてはつと恟り、先も氣遣ひ、爰も遁れず七轉  
八倒心は早鐘、時に時つく如くなり、ヤア此奴横道者、  
おのれに今日維盛が事詮議すれば存ぜぬ知らぬと云ひ抜  
ける。其まゝにして歸へせしは、思ひよらず踏込む爲、  
此家に維盛かくまひある事、所の者より地頭へ訴へ、早  
速鎌倉へ早打、取ものも取あへず來れ共、油斷の体はお  
のれを取逃すまい爲、サア首討つて渡すか、但し違背に  
及ぶか、返答せよとせめつけられ、叶ぬ所と胸をすへ、  
成程一旦はかくまひないと申したれ共、餘り御詮議強  
き故、隠しても隠されず、早先達て首討たり、御覽に入  
れんお通りと伴ひ入れば母娘、どうなる事と氣遣ふ中、  
鉢桶提た彌左衛門、しづ／＼出て向ふに直し、三位維盛  
の首、御受取り下されよと蓋をとらんとする所を、女房  
かけよりちやつと押、コレ親父殿、この桶の中にはわし  
がちつと大事の物を入れておいた、こな様明けてどうす  
るぞ、ホ我は知まい、此桶には最前維盛卿のお首を入れ  
置いた。イヤ／＼此桶にはこなたに見せぬ物があると、  
引寄すれば引戻し、おのれがなんにも知らぬ故、イヤこ

なたが知らぬ故と、妻は銀と心得て争ひ果ねば、梶原平  
三、扱はこいつら言ひ合せ、縛れく／＼れと下知の下縛つ  
た／＼と、取巻所に、維盛夫婦餓鬼め迄、いがみの權太  
が生捕つたり、討ち取つたりと呼はる聲、はつとばかり  
に彌左衛門、女房娘も氣は狂亂、いがみの權太はいかめ  
しく、若君内侍を猿縛り、宙に引立て目通りに、どつか  
と引すへ、親父の賣僧が三位維盛を、熊野浦より連歸り  
道にて天窓をそりこぼち、青二才にして彌助と名をかへ  
此間はほてくろしき聲せんさく、生捕つて面恥と存じた  
に、思ひの外手強い奴、村の者の手のかつて、漸と討取  
り、首に致して持參御實檢と差出す、オ、成程刺殺ち彌  
助と云ふは存じながら、先達て云はぬは彌左衛門に、思  
ひ違ひをさ／＼爲、聞き及んだいがみの權太、悪者と聞  
いたがお上に對しては忠義の者、出かした／＼、内侍六  
代生捕たな、ハテよい器量、夢野の塵で思はずも、女鹿  
子鹿の手に入るは天晴れ働き、褒美には親の彌左衛門め  
が命、許してくれう。イヤ／＼申し、親の命ぐらゐを許  
して貰うと思つて、此働きはいたしませぬ。スリヤ親の  
命は取られても褒美がほしいか、ハテあのわるの命はあ

のわると相對、私には兎角お銀と願へば梶原、ハテ小氣味のよい奴、褒美くれんと着せし羽織、脱いで渡せば佛頂面、コリヤ、其羽織は忝くも頼朝公のお召かへ、何時でも鎌倉へ持ち來らば、金銀と鈎替囁託の合紋と、聞くより頂き出來た々々、當世かたりが流行るによつて二重取りをさせぬ分別、ようした物と引替に繩付き、渡せば請取つて首を器に納めさせ、コリヤ權太、彌左衛門一家の奴等暫く汝に預くる。お氣遣ひなされませぬ、貧乏ゆるぎもさせませぬテ。扱けなげな男めと譽そやし梶原平三、繩付引立てたち歸へる、ア、これ、其ついでに褒美の銀忘れまいぞと、見送る隙間油断見合せ彌左衛門にくさも憎しと引だかへ、ぐつと突込恨みの刀、うんとにつけに返返る、見るに親子はハツはつと、憎いながらも悲しさの、母は思はず馳寄つて、天命知や不幸の罪、思ひ知れやと云ひながら、先だつものは涙にて、伏沈みてぞ泣居たる。彌左衛門齒がみをなし、泣く女房、なにほへる、不便なの可愛なのと云ふてこんな奴を生けて置くは、世界の人の大きな難儀、門端も踏すなと云ひつけて置いたに内へ引入れ、大事の、維盛様を殺し、内

儀様や若君を、よう鎌倉へ渡したな、腹が立つて、涙がこぼれて胸が裂ける、三千世界に子を殺す、親と云ふのはおればかり、天晴れ手柄な因果者に、よう爲居つたと拔身の柄、碎るばかりに握り詰め、ゑぐりかけるも心は涙、いがみにいがみし權太郎、刃物押へて、コレ親父殿、なんぢやい、此方の力で維盛を助ける事は、叶はぬ。コリヤ云ふな、今日幸ひと別れ道の傍に手負の死人、よい身替りと首討つて戻り、此中に隠し置き、コリヤこれを見居れと、鉢桶取つて折明ければ、ぐわらりと出たる三貫目、シヤリ、こりや銀ぢや、こりやどうぢやと呆れ果てたるばかりなり。手負は顔を打詠め、おいとしや親父様、私が性根が悪きに御相談の相手もなく、前髪のを惣髮にして渡さうとは、了簡違ひのあぶない所梶原ほどの侍が、彌助と云ふて青二才を男に仕立てある事を知らいで討手に來ませうか、夫と云はぬはあつちも巧み、維盛様御夫婦の、路銀にせんと盗んだ銀、重いを證據に取かへた鉢桶、明けて見たれば中には首、はつと思へば是も幸ひ、月代剃つて突付たは矢張りお前の仕込みの首、ムウ其又根性で御臺若君に繩をかけ、何故鎌倉

へ渡したぞ。ホ、其お二人と見えたのは、此權太が女房  
悴、ヤアシテ、維盛様御夫婦、若君は何處に、オ、逢  
はせませうと袖より出す、一文笛吹立つれば、折よしと  
維盛卿、内侍は茶汲の姿となり、若君連れてかけつけ給  
ひ、彌左衛門夫婦の衆、權太郎へ一禮を、ヤア、手を負  
つたかと驚くも、お變りないかと恠りも、一度に興をぞ  
さましける。母は悲しき手負に取付き、かほど正しき根  
性にて、人に疎まれ譏らるゝ、身持はなぜにしてくれた  
常が常なら連合も、むざと手疵も負はせまい、酷い事を  
とせき上で、悔み歎けば權太郎、ヤレ其悔み無用、  
常が常なら梶原が、身代り食ふては歸りませぬ、まだそ  
れさへも疑ふて、親の命を褒美にくれう忝いと云ふとは  
や、詮議に詮議をかける所存、いがみと見たゆゑ油斷し  
て、一ばい食ふて歸りしは、禍も三年と、悪い根性の年  
の明け年、生れ付いて賭勝負に魂を奪はれ、今日もあな  
たを二十兩、かたり取つたる荷物の中に、恭々しき高位  
の繪姿、彌助が面に生うつし、合點がいかぬと母人へ、  
銀の無心をとりに入込み、忍んで聞けば維盛卿、御身に  
迫る難儀の段々、此度性根改めずば、いつ親人の御機嫌

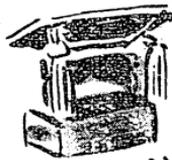
に、預る時節もあるまいと、打つてかへたる惡事の裏、  
維盛様の首はあつても、内侍若君のかはりに立つる人も  
なく、途方にくれし折からに、女房小せんが悴を連れ、  
親御の勘當、古主へ忠義、なにうろたへる事がある、わ  
しと善太をこれかうと、手を廻すれば悴めも、かゝ様と  
一緒にと、俱に廻して縛り繩、かけても、手がはづれ  
結んだ繩もしやら解け、いがんだおれが直な子を持つた  
は何の因果ぢやと、思ふては泣き、しめては泣き、後手  
にした其時の、心は鬼でも蛇心でも、こたへ兼ねたる血の  
涙、可愛や不慙や女房も、わつと一聲其時に、血を吐き  
ましたと語るにぞ、力味かへつて彌左衛門、エ、聞えぬ  
ぞよ權太郎、孫めに繩をかける時血を吐く程の悲しさを  
常に持つてはなせくれぬ、廣い世界に嫁一人、孫と云ふ  
のもあいつ一人、子供が大勢遊んで居れば、親の顔を目  
印に、にがみのはしつた子があるかと尋ねて見ては、コ  
レ子供衆、權太が息子はあませぬかと、問へば子供はど  
の權太、家名は何と尋ねられ、おれが口からまんざらに  
いがみの權とは得云はず、惡者の子ぢや故に、はね出さ  
れて居るであらうと、思ふ程猶そちが憎さ、今直る根性

が半年前に直つたら、のうば、親父殿、嫁女や、孫の顔見覺えて置くのに。オ、くおれもそればつかりがとむせ返り、わつとばかり伏しづむ心を思ひやられたり。

内侍は始終御涙、維盛卿は身にせまる、いとと思ひにかきくれ給ひ、彌左衛門が歎きさる事なれ共、逢ふて別れ逢はで死るも皆因縁、汝が討つて歸りたる首は主馬の小金吾とて、内侍が供せし譜代の家來、生きてつくせし忠義は薄く、死んで身替る忠勤厚し、これも不思議の因縁と語り給へば、テモ扱てもそんならこれも鎌倉の、追手の奴等が皆しわざ、オ、云ふにや及ぶ、右大將頼朝が、威勢にはびこる無得心、一太刀恨みぬ残念と、怒りに交る御涙、實にお道理と彌左衛門、梶原が預けたる陣羽織を取出し、これは頼朝が着がへとて、褒美の合紋に残し置きし、ずた／＼に引裂ても御一門の數にはたらねど、一裂づの御手向、サア遊ばせと差出す、何頼朝が着がへとや、晋の豫讓が例を引き、衣を刺して一門の恨みを晴らさん思ひ知れと、御はかせに手をかけて、羽織を取つて、引上げ給へば裏に模様か歌の下の句、内ぞ床しき内ぞ床しきと、二つ並べて書たるは、アラ心得ず此歌は

小町が詠歌雲の上はありし昔にかはらねど、見し玉簾の内ぞ床しきとありけるを、其返しとて人も知つたる此歌をもの／＼しう書いたは不思議、殊に梶原は和歌に心を寄せし武士、内ぞ床しきは此羽織の、縫目の内ぞ床しきと、襟際付際切りほどき、見れば内には袈裟衣、珠數迄添へて入置いたは、コリヤどうぢやコハいかにと呆れる人々維盛卿、ホウさもそうざさもあらん、保元平治の其の昔、我父小松の重盛、池の禪尼と云ひ合せ、死罪に極まる頼朝を、命助けて伊東へ流入、其恩報じに維盛を、助けて、出家させよとの鸚鵡がへしか恩返しか、ハア、敵ながらも頼朝は天晴れの大将、見し玉簾の内よりも心の内の床しやと、衣を取てこれとても、父重盛の御蔭と頂き給ふぞ道理なる、人々はつと悦び涙、維盛卿もこれ迄は、佛を語つて輪廻を離れず、離るゝ時は今此時と、髻ぶつゝりと切給へば、内侍若君お里はすがり、俱に尼共姿をかへ、宮仕へをゆるしてと願へど叶はず、打拂ひ／＼、内侍は高雄の文覺へ、六代が事頼まれよ、お里は兄になりかはり、親へ孝行肝要と、立出で給へば彌左衛門、女中の供は年寄りの、役と諸共旅用意、手負を勞は

る母親が、ノウコレつれない親父殿、權太郎が最後も近  
かし、死目にあふて下されと、止むるにせきあげ彌左衛  
門、現在血を分けた悴を手にかけて、どう死目にあはれう  
ぞ、死んだを見ては一足もあるかるゝ物かいの、息ある  
内は叶はぬ迄も、たすかる事もあらうかと思ふがせめて  
力草、留るそなたが胴慾と、云ふて泣き出す父親に、母  
は取わけ娘は猶、不惑々々と維盛の首には輪袈裟手に衣  
手向の文の阿耨俱陀羅、三藐三菩提の門出、高雄高野へ  
引き別くる、夫婦の別れに親子の名残り、手負は見送る  
顔と顔、思ひはいづれ大和路や、芳野に残る名物に、維  
盛彌助と云ふ鮓屋、今にさかふる花の里、此名も高くあ  
らはせり



12



野崎村の段

久松堤お染は船

竹	竹	竹	豊	豊	竹	竹	豊	竹	鶴
本	本	本	竹	竹	本	本	竹	本	澤
津	常	播	千	辰	文	源	伊	長	伊
磨	子	路	駒	太	太	太	勢	尾	達
太	太	太	太	太	太	太	太	太	太
夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫
									友
									衛
									門
									糸
									夫

久松染新版歌祭文

野崎村の段

寶永五年正月(二三六八)のお染久松の情死事件を脚色して歌舞伎に最初上演したのは寶永七年(二三七〇)正月、大阪荻野八重桐座の「心中鬼門角」で、當時歌祭文にも唄はれて大阪市中の評判であつた。この人氣を利用して淨瑠璃に仕組んだのが正徳元年四月(二三七一)豊竹座上演の紀海音作「お染久松袂の白しぼり」で、同系狂言の源となつた。次いで明和四年(二四二七)十二月、大阪北堀江座上演の菅專助作「染模様妹背門松」となり、これらを粉本として安永九年九月(二四四〇)大阪竹本座に近松半二作のこの「新版歌祭文」が上演された。これは座摩社の段、野崎村の段、長町の段、油屋の段の全二卷四段よりなり、殊に野崎村の段が有名である後、文化元年(二四六四)八月、佐川魚磨作「増補新版歌祭文」が出た。

梗概

鶴	鶴	豊	野	鶴	鶴	鶴	豊	鶴	鶴	豊	竹	竹	竹	竹	豊
澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	本	本	本	本	竹
友	友	團	八	友	友	友	友	友	友	友	本	本	本	本	竹
	十	伊		太	衛	二					呂	南	土	松	
藏	郎	三	造	郎	門	郎	平	造	彌	糸	賀	次	佐	島	
											太	太	尾	太	
											夫	夫	太	夫	
											夫	夫	夫	夫	夫

疎々たる枝に初梅の、花咲く村の春景色。

娘お光は氣もいそ／＼、日頃の願ひが叶つて久松と女夫になれるのも、天神様や観音様、第一は親のお蔭。こんな事なら今朝あたり、髪を結ふて置かうもの、鐵漿の付けやう挨拶も、どう云ふて能かるやら……と揉手やら、辭儀の眞似やら落着かず、勝手から俎板や庖丁を持出して、祝言の用意の膾大根をちよき／＼と刻み出した。

と、久松の跡を慕ふて堤傳ひ、下女およしを連れて來た油屋の娘お染が、船の上り場で教へられた梅を目當てに久作の家を探し當て、下女を戻すと立寄る門口、今日大阪から久松と云ふ人か戻つて見えた筈、ちよつと逢はせて下さんせ……と言ふ。

其の聲聞くと、思ひ當る節のあるお光、俎板押し遣り昵々と戸外を覗いて悒氣の初物、最うもや／＼と胸は搔き亂れ、何ぢや、久松さんに逢はせて呉れ、そんなお方はこちや知らぬ、と膠もない

腹立ち聲。

其様子がお染は腑に落ちず、ふと思ひ付いて土産代りに希紗包みの香箱を差出すと、こりや何ぢやえ、大所の御寮人様、様様々と云はれても、心が至らぬ措かしやんせ、在所の女子と侮つてか、欲しくばお前に遣るわいなあと、香箱投げ付け、門びつしやり。

其處へ久松連れて出る久作、久松に肩を揉ませお光には灸を點えさせるが、お染の門に居るのを、氣付いた久松の、折が悪いと目顔で止めるのが、お光には又妬ましくて諍ひを初め、夢中になつた揚句は、久作の頭へ灸を點える始末、其れを久作が仲裁して、仲直しが直ぐに取結びの盃、髪も結ふたり鐵漿も付けたり、湯も使ふて花嫁御、作つて置けと打笑ひ、お光を連れて納戸へ入る。其間遅しとお染は駈入り、山家屋へ嫁入せいとほ胴慾ぢや、其方は思切る氣でも、わしや何ぼでも得切られぬ、と久松が残して來た文を突付け搔口説き

人形役

娘	親	娘	娘	丁	油	下	船	駕
お光	久作	お染	久松	久勝	お勝	およし	およし	かき
桐竹紋十郎	桐竹門造	吉田文作	吉田文二郎	吉田多三郎	吉田文枝	吉田文枝	吉田玉徳	大ぜい



用意の剃刀で自害しやうとするので、久松も所詮は深い悪縁と思ひ、お染の手を執つて泣き悲しむ始終を立聽いた久作が出て、久松は實の子で無く、二本差す家柄に生れたのを、妹が乳母で有つた關係から引取つて養つた事から、智慧付けの爲に油屋へ丁稚奉公に出した事を語り、親方の恩も義理も辨へず、嫁入の極まつたお主の娘を咬かす久松を責め、又、お夏清十郎の昔語り擬え、二人の不心得を懇ろに誠め、理を盡して別れる様に合點させると、只聞き入れたとの返辭を喜んで、お光を呼出し、祝言させよと綿帽子を脱れば、島田髻が根元から切つてあつた。

事の意外に皆なが驚くのをお光は押えて、お二人が思ひ切つたと云ふは表向、底の心はお二人ながら、死ぬる覺悟と知た故、何うぞお命取止めたさ、わしや最うとんと思ひ切つた。さあ、切つて祝うた髮容……と兩肌脱げば、下着は白無垢、首には五條袷裳をかけて居る。

玉より清き貞心に、今更ら何と言葉さへ、久松お染が面目なさに、自害しやうとするを久作は止め、蝶よ花よと樂んだ、一人娘を尼にして、出来たと云ふ心の中、思ひやりが有るなれば、何故存らへては下らさぬ……と二人を諫めて合點させ、嗚ぞ母御様が案じてござらう、大事な娘御、誰か確な者に送らせ度いものぢやと、久作が案ずる折、油屋の後家お勝が入つて來た。

様子を殘らず表で立聽き、久作の親切、お光の志しを心で拜んで居たお勝は、二人に禮を述べ、世上の補ひ心の遠慮から、駕で堤を大阪へ戻る久松とは別れくにお染を連れて、船で戻る事にする。

### (佐和利) 野崎村の段

其間遅しとかけ入お染、逢たかつたと久松に縋り付ばア、コレ聲が高うござります、思ひがけない愛へはどうして譯を聞してくと問はれて漸々顔を上げ、譯はそつ

ちに覺があらふ、私が事は思切山家やへ嫁入せいと殘して置やつたコレ此文、そなたは思ひ切る氣でも、わしやなんぼでも、得切らぬ、餘り逢たさなつかしき、勿體ない事ながら、觀音様をかこつけて、あいに北やら南やらしらぬ在所も厭ひはせぬ、二人いつしよに添ふなら、飯も焚ふし、織つむぎ、どんな貧しい暮しでもわしや嬉しいと思ふ物、女の道を背けとは聞へぬわいのどうよくと恨のたけを友禪の振の袂に北時雨、晴間はさらになかりけり。

兄さんお健でお染様、モウおさらばと詞まで、早改まるお光尼、あはれをよそに水馴棹、船にも積れぬお主の御恩親の惠の冥加ない、取分てお光殿、こうなりきたるも先の世の定まり事とあきらめて、お年寄れた親達に、介抱頼むと言さして、泣音伏籠の面ぶせ船の中にも聲上げて、よしないわし故お光様の縁を切らしたお憎しみ、勤忍して下さんせ、ア、譯もないお染様、浮世放れた尼じや物、そんな心を勿體ない、短氣おこして下さんすなへヲ、娘が言通り、死で花實は咲ぬ梅、一本花にならぬ様

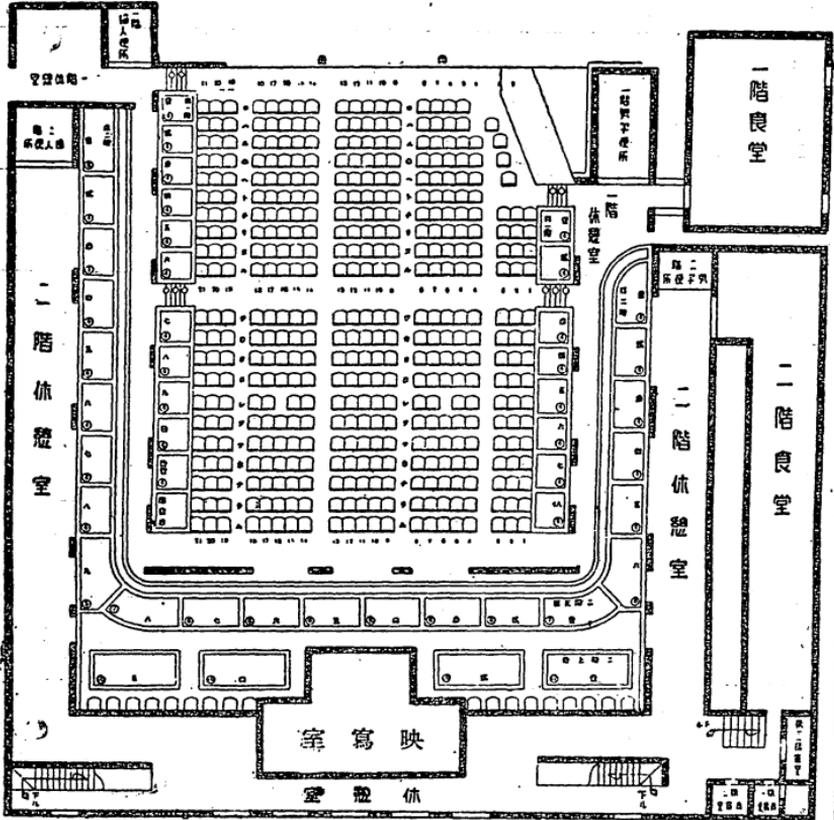
目出たい盛りを見せてくれ、随分達者で、ハイ〜お前も御無事で、お袋様とお娘御もおさらば〜さらば〜と遠ざかる。船と堤は隔たれど、縁を引綱一すじに、思ひあふたる戀中も、義理の柵情のかせぐいかごに比翼を引わくるころ〜ぞ世なりけり。



侍

										觀賞おほえ
										昭和十六年三月 日
										音冴春白月
										薩摩守忠度
										艶容女舞衣
										義經千本櫻
										戰陣訓
										新版歌祭文

# 文樂座御劇場案内



御観覧席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ります

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります  
 二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

# 三 月 の 芝 居 御 案 内

川 湊 戸 神 場 劇 竹 松 <small>四〇四四川湊話電</small>	條 四 都 京 座 南 <small>五五一一圖紙話電</small>	堀 頓 道 座 角 <small>二一二二南話電</small>	堀 頓 道 座 中 <small>九七二一南話電</small>	阪 大 座 伎 舞 歌 <small>六二八二或話電</small>
日 初 日 一 開二午正晝 演回時五夜	日 初 日 一 開二午正晝 演回時五夜	日 初 日 一 開二午正晝 演部時五夜	日 初 日 一 演開半時三	日 初 日 一 演開時四夕毎
梅 澤 昇 一 座	新 舊 合 同 劇	彌 生 大 歌 舞 伎	東 京 新 派 大 合 同	曾 我 迺 家 五 郎 劇 (日曜マチネー正午開催)
第 第 第 第 四 三 二 一 百 海 書 電 太 苔 卸 し 月 の 素 浪 人 柱 郎 騒 ぎ	第 第 第 第 四 三 二 一 權 働 くらぶ山忍春雨驛 三 と く 助 十 母	(晝の部) 彦山權現誓助剱 ある日の坐漁莊 大津事 國訛嫩笈摺件 生きてゐる烈士 上生きてゐる烈士 下柳の河子原守 乗合船恵方万歳	第 第 第 三 二 一 新 新 新 篇 篇 篇 壁 陣 マ 下 サ 地 訓 傳	第 第 第 第 四 三 二 一 二 子 姉 旗 人 の は 泣 日 の アル バ ム 寶 ぐ
一 二 三 四 等 等 等 等 席 席 席 席 一 八 五 三 圓 十 十 十 (税別) 錢 錢 錢	一 二 三 四 等 等 等 等 席 席 席 席 二 一 七 五 圓 十 十 (税別) 圓 圓 錢 錢	特 一 二 三 四 五 等 等 等 等 等 席 席 席 席 席 二 二 一 一 八 五 圓 圓 圓 圓 圓 (税別) 九 五 十 十 錢 錢 錢 錢 錢	特 一 二 三 四 五 等 等 等 等 等 席 席 席 席 席 四 三 二 一 一 五 圓 圓 圓 圓 圓 (税別) 十 十 十 錢 錢 圓 圓 圓 錢	一 二 三 菊 櫻 等 等 等 席 席 席 席 席 席 席 三 一 一 八 五 圓 圓 十 十 (税別) 錢 錢 圓 圓 錢 錢

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場であります。

文樂座人形淨瑠璃は 曾に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に

背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ります。

賣店 は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出入口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを付けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勸めますから強め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として 案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上げる事に致しました。御一報次第登壇上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十六年 二月廿八日印刷  
昭和十六年 三月 一日發行

大阪市西區久左衛門町八番地  
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪南區久左衛門町八番地  
松竹株式會社大阪支店內  
發行所 鳥江鏡也

大阪南區住吉通一丁目十二番地  
印刷所 永井日英堂印刷所  
一部 金二十錢

# 文樂座南一食堂

御食事の御用は一幕前には御下命賜は  
 ばれば至極御便利で御座すまい

(御食事時間) 五時か八時まで

大坂四ツ橋

# 南温泉料理

御宴會にも  
 御家族連にも

電話南  
 ①五

一	一	一	一	七
三	三	三	三	〇
三	三	三	三	一
四	三	二	一	一
番	番	番	番	番

